研究課題　18世紀オランダ東インド会社の遣清使節日記の翻訳と研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　大野晃嗣（東北大学文学部・教授）

　所内共同研究者　松方冬子・大東敬典

　所外共同研究者　森田由紀（翻訳者）・Leonard Blussé（ライデン大学人文学部・名誉教授）

研究の概要

（１）課題の概要

　オランダ東インド会社は、清朝との貿易を実現・改善するため、何回か使節団を派遣しているが、そのうち、1794～1795年の乾隆帝の在位60年を祝う使節団は、有名なイギリスのマカートニー使節団との対比上も有名である。正使は、日本商館長を務めたティチングであった。しかし、ティチング使節団の残した記録は、ティチング自身によるオランダ語の日記のほか、副使ファン・ブラーム・フックへーストによるフランス語の日記、さらに通訳として同行した学者ド・ギーニュによるフランス語の日記があり、最低限でもオランダ語とフランス語の読解力が必須である。さらには地名・人名・官名を含む当時の中国についての広範な知識をも必要とするため、今まで日本語に訳されたことはなかった。今回、中国史研究者（大野、Blussé）、オランダ語史料の翻訳実績を持つ史料編纂所海外2室の教員が、在野の翻訳者に協力する形で、この課題に挑む。

（２）研究の成果

　少しずつではあるが、多分野の研究者が一堂に会することによる、新たな知見が生まれつつある。ほんの一例ではあるが、オランダ使節のティチングが、Sjapというマレー語で表現しているものが、清朝の総督・巡撫が任地にあっていわば「皇帝の代わり」として儀礼に使用する「龍牌」（大清會典に見える）であることが判明した。